

# 浄土

十月号

昭和十月五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和二十四月四月二十八日 運輸省 (特別採承認雜誌第三五二号)  
昭和四十年九月二十五日 印刷 昭和四十年十月一日 発行



法然上人鑽仰会

## 阿弥陀如来像

鎌倉・浄光明寺蔵

アミダさまについて多くを語る必要はない。けれども、わたくしにはこんな思い出がある。子供のころ祖父は朝四時の勤行をしいた。お経をあげながらアミダさまはときにはうらめしく見えたものである。毎朝見上げているアミダさまは変わるはずがないのに、ときどきお顔を変え、子供のわたくしに何かを話しかけているかに見えたとき、言いようのない気持ちに打たれたことを記憶している。そのとき、わたくし自身の内奥に変化があったのであって、アミダさまに変化があったはずではなかった。だが、木仏とわたくしの交流は確かにそのときそこにあったのである。この不思議な語りかけが今のわたくしを作り上げていることになる。

鎌倉に現存するアミダさまは数少いが、このアミダさまはまさにその代表の一つで、宋朝様式として知られ、宝冠をつけ、卵形の女性的なお顔と着衣にある花模様（つばき）の土紋、いずれも鎌倉特有のお姿である。上品中生の印を結んでおられるが、これは当時の説法印であろうか。眺めてあきるアミダさまではない。またまた、わたくしに何かを教えさとしてくださるようである。

(石上 善 応)

## — 目 次 —

|                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 巻頭のことば 一文不知        | (1)             |
| 随 筆 井原文雄・戸川靈俊・高橋信道 | (2)             |
| 秋情仏心 お十夜に寄せて       | (4)             |
| 読売ランド法要記念特集        |                 |
| 仏壇と生活              | 佐藤 密雄 (6)       |
| 法要供茶式に当りて          | 平林 樵久 (8)       |
| 読売ランド法要随記          | (8)             |
| すばらしい祐天の法力         | 松崎仁三郎・中島正方 (11) |
| 近世文名録 名越隆成僧正       | 高橋 良和 (16)      |
| 仏教人生訓 赤子念仏         | 宝田 正道 (18)      |
| 浄土のこよみ             | 大橋 俊雄 (21)      |
| 一言法談 往生できない人       | 渋谷 賢応 (22)      |
| 家康と三河一揆            | 鶴田 湛泉 (24)      |
| ご法語をいただく           | 村瀬 秀雄 (32)      |
| ベトナム便り             | 山本 雄毅 (27)      |
| 編 集 後 記            | (33)            |
| 日本浄土教物語 浄土宗中興の学僧聖問 | 鈴木 成元 (28)      |

有智無智 持戒破戒をきらはず、阿弥陀  
ほとけは来迎し給事にて候なり。

法然上人御法語



## 一文不知

「読書の秋」といわれるとおり、十月はおちついた雰囲気、本でも読んでくらすにはまことによい時候である。本にもいろいろあって、雑誌小説もあればむずかしい研究論文もある。一日で一冊よめてしまう本もあれば、十日間かかっても読み切れぬものもある。しかし考えてみると、本ほど多くの人の努力のこもった、価格の割には安価なものはない。十年二十年かかった尊い研究論文がネクタイ一本ぐらいの値段で買えるし、映画を一度見たつもりで教養の香り高い新書版が手に入る。

ところが、最近では週刊紙をよむ人はあっても、まとまった本をよむ人は余りない。また学生や文筆家が必要に迫られてよむのは、正しい読書とはいえない。静かな気持ちで、心の糧としてじっくり読むことこそ真の読書である。

ある仏書専門の本屋さんにきいたところ、各宗の中でよく本を出し、売れるのは真宗、曹洞宗、日蓮宗だとのこと。わが浄土宗の名が出なかったのは残念であるが、考えてみれば、わが「浄土」誌の状況をみれば大体的見当はつく。

どうも、浄土宗の人々は宗祖のお言葉「一文不知の愚鈍の身」を誤解しているようである。

(N)

## 投身謝罪の誠

井 原 文 雄

(柳井瑞相寺住職)

瑞相寺住職を拝命した「はやはや」の頃である。ある日、私の師僧であり、父でもある先代が、こんな話をしてくれた。

私の師匠がなあ、こんなに云うて聞かせて下さったことがある。

師匠というのは、この寺から増上寺の御法主に、更に総本山知恩院第七八世の法燈をつがれた竟譽大僧正、野上運海上人のことである。

お寺の住職にも「びんからきりまで」ある。だが、住職一代の間、お寺を焼かずに、御本尊様のお給仕を完うすることが出来た者は「一人前の住職」である。

然し、人間、一生涯の間には、いつ、どんな災難にあうことがあるかも知れぬ。お寺から火は出さなくとも、隣りからの類焼もあれば、飛火もある。

不幸にして、万一、火災という非常なこと

## しつけということ

戸 川 靈 俊

(黒谷西住院住職)

その家だけは、毎年盆の棚経を八月八日に参るのが例であった。父に伴われるのであるが、私が大学に入る頃、その家も相国寺畔の塔の段に移られた頃からは、たいてい私ひとりであった。この若僧の誦経の間、あるじ夫妻は、うしろに威儀を正して、低く声を和して参っていられた。

済むと、いろいろのお話はずむ。私は、この天下の大学者先生——その名は、中学の地理の教科書の著者として、とっくになじんでいたの——と対談できる光榮に感激しつつ、その円転滑脱のお話ぶりに、いささかの窮屈さも感じさせられない。

経が始まるころ、袴に服装を整えた学生姿の子息たち——年令も殆んど私と相前後する——が、両親の背後に神妙に控えて、経が終ると、あるじの目合図にしたがって、静かに一礼して仏間を去ってゆく姿が、今なお強く

## 精薄児に救いはあるか

高 橋 信 道

(太田市立養護学校教諭)

精神薄弱児と共に八年間暮してきた。そして考えることは、精神薄弱児にも救いがあるであろうか、ということである。私は僧侶とし、仏教者としてこのことが一日も念頭を離れない。愚鈍の身になして、ではなくて、愚鈍そのもの、生れたくて生まれてきたのではなく、生み度くて生んだでもないのに、とにかく百人に三、四人の割合で知恵のおくれた子供が存在しているのである。

我子の明日を考えて、ほほえみながら眠る母親、それは平安に充ちた状景である。が、我子の前途を考え、成長しては困る子供の寝顔を見て、夜毎涙を流している母親が、私の知る範囲でも数多くいるという現実である。何をどう教えたらいいいのか、どう教えたらいのか、この子供たちが将来世の中に出て生きて行けるであろうか。それよりも遊ぶことさえも知らぬ子供たちと今日一日を何をして遊んでや

がおこつたら、住職というものは、先ず本堂にとびこんで、御本尊様のお供をすることだ。それがすんだら、過去帳を出すことである。これだけは、住職が身をもって果さねばならぬ大切な「つとめ」である。

もし、このことが出来ないとしたら、せめて、御本尊様の「おつむ」だけでも、お供を申しあげることだ。

それも出来ないという場合には、火災に身を投じて謝罪すべきである——という、きつい「いましめ」である。

一昨年一月、瑞相寺は隠居所の炬燵から火を發して、本堂、書院、庫裡が全焼した。

師父は、この寺に、このことありと、このことばをのこしてくれたのであろうか。投身謝罪！そんなことが……とさえ思つて聞いた私である。だが、不思議なことに、住職としての「つとめ」だけは果すことが出来ていた。それは私の「はたらき」ではない。

半人前になりさがった今、高僧ののこされた教に生かされている、わが身のありがたさに、涙する思いの消えやらぬ私である。合掌

印象に残っている。

その子息たちとは、後年の小川（芳樹）、貝塚（茂樹）湯川（秀樹）小川（環樹）博士ら所謂小川学者兄弟の若かりし日の姿なのだ。——うち、惜しくも長兄芳樹さん（東大教授・機械工学）だけが数年前に長逝された——。そして、この家のあるじとは、地質学の權威如舟小川琢治博士その人なのである。

今日の三博士それぞれの信仰のいずれかは知らない。しかし三博士の人となりとその業績に思う時、小川家の仏間に垣間みたそのかみのしつけ？の一端に、私は深く感慨を覚えさせられるものがある。

さる年の夏、「兄たちは、今年は帰省せぬ者もあったり、研究旅行に出ている者もあったりしますので」と、誦經のあとで母堂に紹介されたひとりの少年、その人は四兄らの迎る学問の道とは異り、大学の法科を了えるとすぐ鉱業界に入つてゆかれたのであるが、この末弟こそは、さきの大戦に、この一家が祖国に捧げた唯一人の尊い犠牲——英霊なのだ。

ろうか、毎日思いなやんでいる。そして更にこの子たちにも救いの道があるであらうかと。山川草木悉有仏性といわれる。が彼等にも仏性があるであらう。それならばどんな手だてで仏になれるであらうか。

唯一向に念仏すべし、と祖法然は教えて下さった。しかし、日本の公教育の中では宗教々育は許されていない。仏心者大慈悲、というその慈悲をどうこの子たちに感得させることが出来るであらう。

今日只私の出来ることは、私自身がひたすら念仏の中に阿弥陀大慈悲の慈悲をいただきそれをしも、身体から身体へ、皮膚から皮膚へ、毛穴から毛穴へ、人間愛情のぬくもりとして伝えること以外に道がない。

悩める母と共に泣き、ささやかな子供たちの成長にも、共に笑つて今日を、又明日を過す以外に方法はない。そして世の人の仏心の支えの中に、共に手を取つてこの子供たちを幸福にしてやりたいものである。

# 秋情仏心

——お十夜に寄せて——

一

人のところは常に流転動揺する。そのたびに他の人の心をきずつけ、やがて自らのところもきずつけて空虚さを味っている。凡夫のかなしさである。なかなかここにころ安らいだ寂静の境地のえられないのが我々のすがたであらう。

しかし、寂静の境地は、つねに正しい信仰をもち、正法を護念している人には、容易にえられる心境である。人は行住座臥、なにをしている時でも、していない時でも、心だけは、つねに信仰の方向へ廻していることが肝要である。

「信仰はつねに心の態度を確立たらしめる」といわれるのも、このことである。

航海中の汽船が波浪にもまれながらも、沈没をまぬかれるのは、廻転している機関のためである。

同じように、人生の波浪にも信心の機関がありさえすれ

ば、倒れずにすすむことができる。

いま、みのりの秋と共に、念仏信仰の秋でもある。燈下のもと、仏前にひざまずき、経を誦し、唱名を称えれば、気はおのずから澄み、心は次第にひらかれてゆく。念仏の功績は、いかに頼もしく力づよいことであらう。

自分が、終日に、見たことの悦び、聞いたことの悲しさをしたことの誇り、誤まれることの悔い、それらはすべて夕べの念仏称名のまえには、柔かくとけこんでしまうものである。念仏称名は正業であるといわれるのは、このころであらう。

身を正し、心を調えれば、身口意の三業は念々に正されてゆくのである。

人の、病いによって見直された健康はありがたく、死によって見直された生は尊い。人の、念仏によって見直され

た生活は奥ゆかしいものである。

「なるようにしかならぬ」生活が「思うままになる」生き方に変るのは、念仏信仰によって転ぜられるすがたであろう。

## 二

桐一葉、音なく散る  
すがたに秋声をきく。

うたた匆忙の世のなか  
においては、我れや先  
き、人や先き、今日と  
もしれず、明日とも計  
ることのできない、か  
げろうのような露命で  
はあるが、また同時に  
いつまでも長らえるか  
も知れぬ生命でもあろ  
う。



光明寺 地祥の夜十

したがって、いつ、いかなるところで死んでもよいとい  
う覚悟は大切であろうが、また、いつまでも生きぬくとい  
う用意も肝要なのである。

死ぬる覚悟、生きうる用意、この二つになくはならぬ

ものが、念仏の二字である。

念仏の念は「今の心」といわれる。生死にさまよいなが  
ら、散乱動転して生きている、今のこの身、このままのこ  
ころに安心立命をうるこそ、実はいちばん大切なこと  
であろう。

秋の夜半、ひそかに夢さめて、ひとり念仏をとなえるな  
らば、おのずから仏心のささやきが聞えるであろう。行基  
菩薩は、

秋風にあうて真如を念ぜざるは、信心のうときなり  
といわれた。

俳人一茶も、いくたびか、月に泣き、秋風に心を乱し  
た。

もろもろの愚者も月さす十夜かな

仏性は天地の風物にやどり、草木に仏相を觀じ、風雨に  
説法を聞く、これはみな如来の換喚のすがたである。

いま月はさえ、気は澄み、風は渡る。秋ふけゆくと共に  
仏の道にいそしむ。念仏の声ひとときわ高まる、お十夜の意  
義はふかく尊い。

# 読売ランド法要記念特集

## 仏壇と生活

法要導師 佐藤 密雄

(大正大学学長)

昭和二十年八月十五日は、二十年前の大東亜戦の終戦の日であつて、日本人が初めて敗戦を迎えて、戸惑った日である。私は召集を受けて一兵卒として九州にいた。熊本県の今藤という村に配置されていて、そこでこの日を迎えた。通信兵として、二等兵という一番下の階級であつた。私共の仕事は北九州に東西横断の電信線を架設することであつたが、資材が来ないので、村の農家に分宿してそれを待っていた。人数は一個中隊であるから二百人位であつたかと思うが、仕事がなく、一箇月の間に村に奉仕して田の草取りを二回程した。またこの間に、兵が二人病死したが、この葬式は私の仕事であつたし、村の戦死者の家へ命日にお参りするのも私の仕事になつた。この村は浄土真宗仏光寺派の門徒衆であつて、どの家にも自慢の仏壇があり、各家では、仏壇の仏具の重量の多いことを競つていふように見えた。勿論村には教会も寺もあるが、戦争で僧がいないので阿弥陀經の読める私が、その代理をつとめたのである。

坐するのであつた。然し私と同宿の兵士の六名は、その仏壇のある座敷に宿泊しているのであるが、私の読経中は庭に出て、雑談をして居て、私が読経が終ると村上家の朝茶のサービスを受けるのである。それから神社に集まって点呼と体操があつて、大隊の食事場で朝食となる。老人に氣に入らぬのは、私の読経中に家人がお参りしているのに、その家に厄介になつてゐる客である兵士達が庭で雑談をしていることである。この地方では、その家にきた客人は先ず仏壇を拝してから家人にあいさつをする。ましてその家の主人等が仏壇を拝する時には客人も礼拝するのはエチケットである。そこで、老人の「日本が敗ける害だ」という大げさな発言は、実は兵士達が仏壇を拝しない非礼とその宗教をおそれない不心得をとがめたかつたのである。このことあつて以来、兵士達は毎日私の読経中仏壇を拝するようになつた。

私はここにゐる間、終戦後も復員事務がおくられて九月十五日までいたが、その間に、この村の人達が仏と俱なる生活をしているのを見た。朝起きると仏壇を明け必ず仏器に仏飯を供え、通常は主人が正信偈を読み、家族は来つて、俱に礼拝し念仏する。これが終つてから、半開きにして一日中仏壇はあけられてあり、客人等が来たれば先ず礼拝するし、贈物等は必ず仏前に供える。家族はひるは農場

私が分宿した家は村上直記さんという家で、此処にも大きな仏壇があった。この家へ私共が入る時、私の上官の上等兵殿は、越後の染物屋さんだったが信心深い人で、私に「あの仏壇にお経を読んで呉れ、そうすれば、此家の私共に対する待遇もよくなる」と告げたので、私は阿弥陀経と一枚起請文とを読み、念仏を唱えた。効果はてき面というべきか、私が読経をしてる間に家族の人は集って、読経の切り目に念仏するのであった。私が僧侶であるので、家族から大切にされ、同宿の兵にもそれが及んだ。

終戦の日、十一時に非常呼集があつて、神社の広場に全中隊員が集められた。其処は、私共第一大隊の食事する場所の近くであつたが、命令は十二時前に各隊が食事を終つて、各隊の食事場で、重大放送を聞けというのであり、その時に不敬にならぬ態度であるようにという注意があつた。そして十二時に聞かれたものは天皇の終戦の、いわゆる玉音放送であつた。

私共は放送をきいて、安心とも不安ともつかぬ気持ちで、各自の宿舎に帰ったが、私が宿舎である村上宅に帰ると、村上老人が庭先にいて私を大きい声で呼び、「日本が敗ける筈だ」と叫んだ。それから老人は私を炉辺につれ込んで冷酒を呉れた。当時としては寔に貴重な酒を飲み乍ら老人の語るには、神仏を信じない兵に勇戦は出来ないし、まして勝利等はないというのである。やがてどうして老人がそんなことをいうかということが判った。

私はその村上宅で、毎朝点呼前に阿弥陀経を読んだ。その間、村上家の人々は私の背後に坐ってお参りし、出かける人は礼拝して中

に居るが、晩は夕食前に灯明がつけられて、主人が御文章を読み上げ家族全員で聴聞する。そして就寝前には各人が、別々に仏前に礼し、最後に主人が仏壇の扉を閉すというのが一日の順序である。この村の人は、仏と俱に起き、一日中仏に護られて働き、一日の働きが終ると仏に感謝して、仏と俱に休養につく生活をしているのである。その村に悪事の起らないのもその為であろう。そして、この生活は私が少年時、富山の高岡で、私の生家で経験したことを思い出させた。私の生家は西本願寺の門徒、父が死んで母が再婚したが、そこも同じ門徒であつた。父も義父も母もよく正信偈と御文章を読んだので、その声が今日でも耳についている。

私がこのようなことをいうのは、戦後の日本が大混乱し、道德論理も失われたように言われつつも、實際は案外堅実に、社会生活も正常に発展しているのは何によってであるかと考えたからである。

これは、日本人の生活の根底に、私が九州で見たような、又私の幼年時代に経験したような、仏教的生活があつて、これが見えない力となり、行き過ぎの防衛となつてゐるからであろうかと考える。

かつて、日本軍の支柱は農村の生活であるといわれたが、私は現代の日本の道德的エネルギーは日本家庭にある仏壇と俱なる生活だと見る。去る九月五日に私は京都のデパートに行われた仏壇の展示会に招かれたが、種々な新型の然も荘厳な仏壇が沢山あつた。そして依然として、地方にも都会にも仏壇が盛んに売れていると聞いた。私は、そのことを意外にも感じたが、またそこに見えざる仏教の力のあるを思つて、たのもしくも感じた。(当日の講演より)

## 法要供茶式に当りて

平林 樵 久

(大正大学茶道講師)

炎天下、青空を切り落した姿の天幕の蔭、大正大学々長、職衆諸大徳、読売社主、大衆肅然注目の中に、油適袖天目茶碗に点ぜられた一服の茶。大導師猊下の御加持を得、仏前へ供せられて緊張の一瞬が終る。

此の供養式出仕幹旋の労を頂いた学長先生を始め、常日頃何くれとなくお世話頂いてゐる学生課長安居香山先生、そしてこの出仕に当り、企画、諸道具の調達に奔走された部長先生に、供茶、施茶共無魔終了の報告の出来る嬉しいひと時である。点前内山秀浩、給仕大滝弘子外猛暑を厭わず、汗まみれの、稿古企画、準備の毎日、部員一人一人の努力が今達せられた感激の瞬間でもある。

私は、供茶式に限らず、大寄茶会をこう思う。成功不成功の鍵は、当日にあるのではなく、周到な準備、充分な稽古の全てを終った時にあるのだと。剣、居合では、鞘の裡の勝利とか。剣を抜かず勝敗を決する。これは相手の力を知る以上に、己れの力の限界を知る必



風景要法

## 読売ランド 法要随行記

八月十五日。それは誰も忘れることのできない終戦記念日である。二度と、このような悲劇を繰り返すまい。こうした決意が、全国的にみなぎっているのも、この日であった。

この日は、丁度、日曜日であった。世界一のランドをという正力松太郎社主の雄大な構想そのもののごとく、ランドは誠に広大であった。遙か彼方にまで、モノレールの軌道が円弧をえがいて走っており、美しい泉水や滝が、涼しい音を立てていた。この日は、ランド一杯に遊覧客がみちみちて、賑やかであった。

この一角に、聖地公園がある。陽光門となづけられる大名屋敷の大門（三百年前のもの）をくぐると、聖地公園である。これを過ぎて泉石豊かな道を歩いて行くと、海拔一一〇メートルの山上に、二〇メートルほどの釈迦如来殿があり、さらに中腹には、観音堂、八角朱殿の妙見堂がある。

釈迦如来殿には、仏舍利と聖髪がまつられ、仏舍利は、セイロン

要があろう。茶会も全く同様で、ここで相手を茶会とすれば、己こ  
こでは、茶道部の茶道に対する理解とそれを茶会を借りて表現する  
能力とでも云おうか。

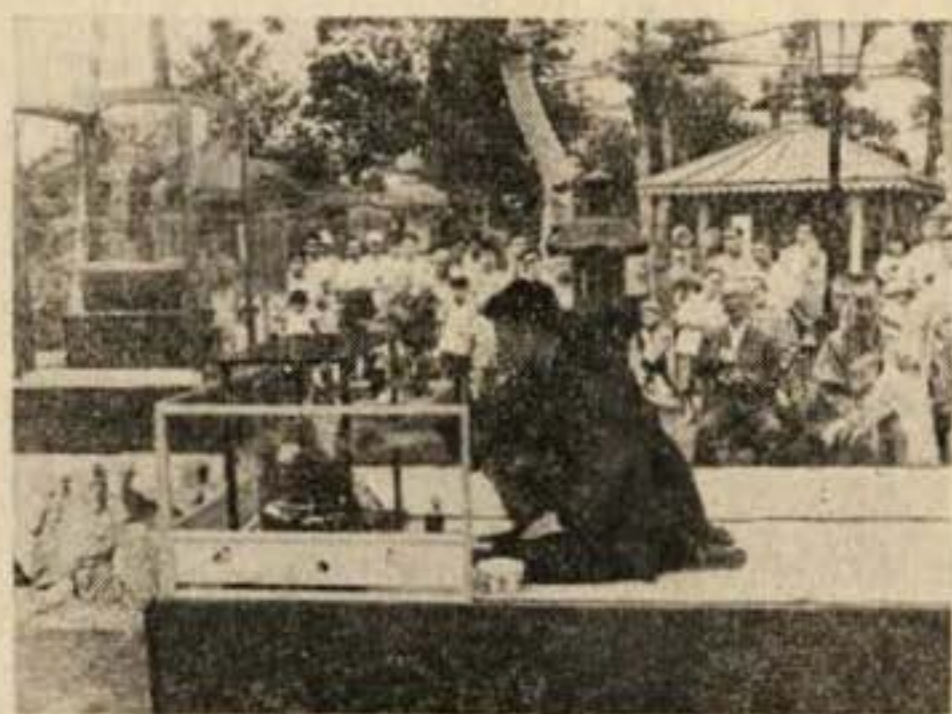
ここに基盤を置き茶会は企画される。今回の供茶式並野点席（施  
茶）は八月初旬出仕依頼を受け、当日が、月遅れ盂蘭盆の十五日。

暑中休暇中帰省部員約半数の条件が出ると、  
部長先生、幹事長、企画部懇談、次々と企画  
が実行され準備される。私はこの企画に即し  
た点前を指導すれば良い。

テーマ 供茶 台子の貴人点、野点（施茶）  
行脚の趣向と決まり、特に野点では、仏教大  
学ならではの企画が生まれてくる。

盆の十五日とて、一尺四寸巾のマコモ（部  
員の手編）を風炉、水指の下に敷き、客を夏  
安居あけの衆僧に見立て、托鉢笠に色紙を掛  
け軸床間のかわりとして、祖先崇拝の思想を  
茶席に迄取り入れ、見事に表現している。

金子良運部長先生の提案に依り、野点席に  
は、多少の風でも茶釜がとばぬ様、粗相の無い様との配慮で、桐の  
薄板を敷き銀釘を打ち茶釜を立てる。水指は白木をつるべ、グリー  
ンのカーペットは芝生に見立て、緋毛織とのコントラストが良い。  
全体に旅先での気軽な一服、老若男女、茶の経験の有無にかかわり  
なく、気楽に茶が飲める配慮が窺える。



政府から贈られたものであり、聖髪はバキスタンより贈られた至宝  
である。堂そのものは小造りではあるが、大理石を敷きつめた殿内  
には、大きなガラス製のドームがあり、まばゆいばかりに仏舎利塔  
は輝いている。

観音堂には、国宝聖観世音菩薩をまつり、妙見堂には、国宝妙見

菩薩像をまつり、いずれも美観をもって、聖  
地公園をかざっている。さらに、下の方には  
仏教七宗の開祖像がならび、伝教・弘法・法  
然・栄西・親鸞・道元・日蓮の各師が、個性

ゆたかに並んでいる。まことに此の山一帯は  
日本仏教を鳥瞰図にしたような景観で、四囲  
の遊園地の中では、特異な地域として、参拝  
者があとを絶たない。

毎月十五日には、此の釈迦堂を中心として  
大法要がいとなまれ、各宗管長、各本山法主

等が導師となり、盛大な式典が催される。今  
年の八月十五日は、大正大学学長の佐藤密雄  
博士が導師となり、大正大学関係者が随喜し

更に尼僧法団の人々が参加し、盛大に行われた。佐藤博士は正装に  
威儀をただして行列の中に入り、随喜僧十数人を従えて、陽光門か  
ら出発した。陽光は燦として輝き、聖地公園内での行列は、荘厳で  
あった。正力社主も自から迎え、祖師像前へと進み、ねんごろな読  
経が行われた。そして、最後の祖師像前での読経が終って、佐藤博

後日の反省会では、供茶式列席の諸代に供茶終了後その序で茶菓の嚮応をする案。大導師を始め職衆諸大徳二十分に亘る炎天下のランド内練行で渴しているに違いないし、渴をいやす為の茶を置いて外にない。従って当日供茶式々場にて、茶菓の接待が出来なかった不備を反省し次会を期している。又水屋と席中の連携動作の不整等反省の諸点は明日の茶会への精進の糧として不可欠のものである。茶を単なる嗜好品としてでなく、茶の湯を自己を見つめる道であるとする部の方針の上に、此度の供茶式は誠に得難い、一茶会でもあった。

七月初旬、鎌倉、関東総本山光明寺の一隅を借りて行なわれた、第六回合宿のテーマが供茶と施茶である。一週間早朝勤行の折、御本尊阿弥陀仏へ供茶。其余徳を、稽古の折に施茶として頂戴し、夕刻、勤行の折、一日無事精進の感謝を念じて、茶を下げる。この日の行業が、晴れの檜舞台を得て見事結実した感が深い。

次の時点ではこの供茶、施茶をポイントにした、茶道伝導、本尊法楽・供茶式・法話・別席にて施茶・講習「簡単な茶の点て方飲み方」の要項が討議されている。テストケースとして、二、三の寺院の施餓鬼会に於て、供茶参衆に施茶の接待が部員の手で行なわれ、共感を呼んでいる。

多少の問題点も在り討議されているようだが、部長先生、部員の手で企画実行される事も遠くはあるまい。月例法要供茶式と、施茶野点席の両席は大正大学茶道部、仏教系大学の指針とも云える多くの問題を含んでいる有意義な茶会に外ならない。

士は簡単な講演をした。終戦記念日を迎えての感銘深い話であった。マイクを通じて、この声は全ランドに流れた。多くの遊覧客は、それぞれの位置でこれを聞きながら、感慨深げであった。

大正大学茶道部が、この法要に参加し、献茶をし、更に参列の人々に茶をすすめた。法要中の行事として、異彩をはなつた。真夏の陽光は、敷きつめられた真赤な絨毯を、いやが上にも赤くし、目にしみるようであった。

この一連の行事は、考えようによっては、まことに些細なことである。しかし、一步進んで考えてみると、なかなか意義深いことである。仏教がインドに発生し、中国を通じて、今、日本において始めて、その真価を発揮し、民衆の生活の中に生きている。そして仏舍利と聖髪を迎えた、日本の地のこの一角で、その祭祀が行われている。それは、渡来当初、考えも及ばなかった出来ごとに違いない。

さらに、仏教は、平和を本旨とした民衆の信仰である。今、世界は、必ずしも平和でない。ベトナムに、インドに、仏教徒同志が相打ちをしている。誠に釈尊の教えにそむくことも甚だしい。釈尊自から悲憤しておられるに違いない。時あたかも、日本においては、終戦記念日である。誰しもが、「戦争はもういやだ」と叫びたくなるときである。

こうした時に、ここでこの様な法要が行われる事は、何としても意義深い。われわれは、単にこれを形式的な法要にとどめず、真に世界平和の礎となるように、願わずにはいられない。(編集部)

# すばらしい祐天の法力(二)

松崎 仁三郎

中島 正方

## 悪太郎の発心

明暦三年(一六五七)下総の国守谷雲天寺では、本堂改築の入仏供養を行うことになったので本山の飯沼弘経寺に指揮を乞うべく相談に参った。住職檀通和尚は種々協議をした結果、和尚は結願の日に十念回向に臨む事として、名代並びに説教僧としては、勘当中であるが祐天を遣わすことにした。祐天は、二十一の若年で風采も上らず、袈裟衣あかじも垢染あかじみたものを用いていたから、ちょっと見ると、どこかの乞食坊主位にしか見えない。今度雲天寺に参るにしても、ふだん着のままに草鞋ばきで、着替えさえ持たない始

末だから、途中まで出迎えに来ていた僧達も、御名代として本山から遣わされた方とは、思えなかった程である。それで参詣人の中には初め軽蔑していた者も相当あったが、だんだん話をして見ると祐天の人柄がわかってきた。説教する度毎に人々は驚きの目を見張って尊敬の度を増した。話も進んで五日目のこと、次の様な因縁話をした。

昔山城国(京都府)に獵師おびただがいた。家業がら生物いきものの命を取ることに夥しい。彼には老母がいたが、もとより親孝行などは夢にも知らぬ人間で、他人に対しても、非義非道の振舞が数えきれない。その名を水次郎と申したが、余りに

大悪無道なので、附近の人は悪次郎と呼んだ。すると、悪次郎の家へ毎朝まいあさ、たくはつに来る僧があった。悪次郎は仏法はいまましいと言って、一粒の施しもしない。しかし、その僧は日毎に怠らず、又刻限もたがわず訪れ、それが一年余りに及んだ。或時悪次郎は朝早く狩りに出たが、あいにく一匹の獲物もない。腹を立てて帰って来た処へ、いつもの僧が来たので悪次郎はその僧を散々になぐってしまった。

毎日まいにち来て錢を乞うが、私は仏教が大きらいだから一粒だって施さないのだ。それなのに性こりもなく来るとはどんな訳か。よろしい。これから二度と来られない様にしてやる。

と、側に鉄火箸の焼けていたのを見付けてこれを僧の額におし当てた。煙が立ち上って、重い火傷やけどをした。その恐ろしさは身の毛もよだつ許りである。しかし、その僧は、少しもさわがず、又驚いた様子もしないで、いつものように念仏をとなえて帰って行った。さすがの悪次郎もその不思議さに驚いてしまった。焼けた鉄火箸を当てられて煙が立ったのに、少しも顔色をかえず、又怒った気色もなく立ち帰るとは、どんな方かしらと思ひ、後からついて行った。すると、悪次郎の在所から三里程隔った、春野に光明寺と

いう寺がある。彼の僧は、その寺の客殿に入ってしまった。悪次郎は、寺に参り案内を乞ひ、

この寺から毎日托鉢たくはつにお出でなさる、御出家にお目にかかりたいのですが、お名前は何と申されますか。

と、尋ねた。すると内から申すには、

不思議なお尋ねじゃ。この寺からは托鉢の僧は、出たためしが無い。それは寺違いじゃないか。

と、悪次郎は重ねて、

いやいや、お隠しなさるな。唯今これまで後を慕って参りますと、その僧は、たしかに客殿に入られたのです。

私は、その御出家にお話承りたく参ったのです。

と、返すがえすも申すので、取次の僧も不審に思ひ、その通り和尚に申し上げた。和尚は、

この寺の本尊は、托鉢に出られると、昔から言い伝えがある。しかし、その証拠を見たものがないのだ。或は本尊であるかしら。

と、住持も不審に思ひ、悪次郎を伴って本堂に行つて見ると、本尊弥勒菩薩みろくぼさつの御額に、焼け火箸の跡が二本あって、ただれて血がにじんでいる。住僧始め僧達悪次郎、皆奇異の思ひをなした。さすがの悪次郎も、始めてもったいないという事を知った。

人の性は善である。ただ人それぞれの生活環境によって悪に陥り、性悪を思わせる場合も往々ある。しかし、機会が到来すると、必ず啓発されるものである。悪次郎はこれまでの悪事を悉くさんげして、仏前にひれ伏して泣いた。そして、和尚に向い

私が、今迄の大悪無道はあげて数えきれない。老母には不孝の罪を重ね、仏道のありがたさなど夢にも知らず唯々殺生を業として暮していた。その悪心を、このたびは善心に立ち直らせようという、御本尊のお慈悲から仮りに僧の姿となって、あらわれて下さったのに、知らぬとは申せ御仏体に傷をつけ誠に申し訳ありません。

と、われと我が身をもだえ苦しんでいる。真に、

『悪に強いものは、やはり善にも強い。』とか、悪次郎は、これまでの生活を一切清算して、仏に仕えまっとうと、この座で剃髪させて頂き、弟子になりたいと、ひたむきに申し出た。それで、住職の申されるには、

これを機会に善心に立ちかえる志は、尤も至極である。仏の御慈悲は大悪人をわけてもふびんに思し召されるのです。汝がご本尊の奇瑞によって、一念發起して出家になりたいとは、仏縁の切れない証拠、有り難い御加護な

のだ。よろしい。仏前で剃髪してつかわす。

とあって、仏前に参り剃髪して黒衣の身となった。悪次郎は、本尊に三拝九拝し、住持にも厚くお礼して、急いで我が家に帰り、右の次第を一々老母に語り、

今迄の不孝、何卒ごめん下さい。

と、打ってかわった有様。その上、墨染の衣に替っているので、母は驚き、

御本尊の御奇瑞は恐ろしい。お前が悪心を忽ちひるがえして、めでたく出家となられた事は、この上もない歓びだ。私も決してお前に負けてはおられない。

と、尼法師になり、共に後世を大事と、墨染の衣姿となり、親子諸共念仏三昧に暮した。この事はたちまち近郷近在に知れ渡った。そんな所から、光明寺本尊へ参詣者が群集し、また悪次郎親子の庵室へも、ついでに立寄る者が多くなった。すると、ある夜夢に、光明寺の本尊が現れて悪次郎に告げられるには、

私が、仮りの勧めによって、悪心が忽ち善心となり、母諸共に無二の信心まことに殊勝である。それで、お前に一物を与えようと思う。昔から行きなれている獵場へ、夜が明けたならば早く行って、光のある所へ網を投げてくれ。

と、教えられ、そのまま夢がさめた。悪次郎は不思議に思ったが、お教えに従って、まだ夜のあけきれぬうちに獵場に行き、網を持って小船の中から水中をみつめていた。たしかに一ヶ所光っている所がある。此処ぞと思って網をおろした。引き上げて見ると、金色もまばゆい阿弥陀如来像、悪次郎は、いよいよ信心肝に銘じ、急いで我が家に立ち帰って大切におまつりし、新たに一字を建立して、この弥陀仏を安置し、念仏三昧怠りなく、目出度親子諸共に往生を遂げた。

悪次郎は同心しての名を雲海と申した。また右の阿弥陀如来は、今もなお光明寺に保存されてある。それであるから、三惡道に沈む輩でも十八願の念仏にすぎり、未來を願ったならば、成仏するのは決して疑いない事だ。と、様々の因縁を引いて説法されたから、群集した老若男女は、涙を流して、

祐天様は、お年はまだお若いが、凡僧でない許りでなく、年と共に大善智識となられるお方だ。嗚呼有り難い話だ。

と、知るも知らぬもおしなべて尊び合う許りであった。

### 累及び助の怨霊得脱

祐天上人が天下に名をなした端緒は、累及び助の怨霊を

得脱させたのによる。と言っても過言でない程有名である。それに就ては、拙著『実説かさね物語』に詳説してあるので、此処ではほんの概略に止める。

累の親は与右衛門である。与右衛門は女運が悪かったので、隣村横曾根定右衛門の娘杉を後妻にした。時に慶長十四年（一六〇九）である。杉は、助という三才の男児をつれて来た。この児は何の因果か、ふた目と見られない醜い顔で、その上跛であつた。与右衛門はこれを極度に嫌つて、とうとう杉に殺させてしまった。その後杉は身重になり、翌年女兒を産んだ。累と名づけたが成長するにつれて、助そっくりなので、村人は、助がかさねて生れ變つて来たと言ひ、かさねと呼ぶようになってしまった。助よりは遙かに醜い。

与右衛門は、我が子であるから醜いと言っても、捨てることも人にやることも出来ず、苦悶のうちに育てた。やがて夫婦は相次いで死んだ。

累は孤独となった。何分無類の醜婦なので、誰一人として相手にしてくれる者もなく、三十三まで一人淋しい暮しをしていた。その時、谷五郎という浪人がこの村に来て、熱病にかかり動けなくなつてしまったので村人はこれを念仏堂に入れて世話した。かさねの家はその近所だったの

で、朝夕見舞ってやり医者まで呼んで、よく看護してやった甲斐があつて全快した。それで、それが縁となり、名主三郎右衛門の骨折りで、谷五郎はかさねの聲となり、二代目与右衛門と改名した。この男は、恩義などを知るわけの分つた者ではなかつた。唯累の財産に目をくれたのである。累の醜いのは承知の上でしたが、いくらもたたない中に、外の女にだまされて、累をじゃまにした。体の具合が悪いとか、頭や腹が痛むとか言つて、ブラブラしている日が多く、しまいには累を鬼怒川に押し込んで殺してしまつた。時に正保四年（一六四七）八月十一日であつた。

累の最期の様子は、同村の者も一二名知っていたが、よく知っているのは、報恩寺生れでその時、中妻の靈仙寺に寺男として働きに行つていた清右衛門である。清右衛門は水汲みに来て、対岸の柳の木蔭から、累が川に押し込まれてもがく有様を、見るとはなしに見てしまった。

その後、与右衛門は後妻を貰つたが、どれもこれも不縁で、六人目のきよが菊を産んだ。

寛文十二年（一六七二）正月十四才になつた菊が病んだ。狂乱の末与右衛門が、累を殺した時の有様を口走つて始末にならない。与右衛門は身に覚えがあるから、ひたすら悔悟したが、それだけでは菊の狂乱はやまない。村人達

は落付いて仕事も出来ず、それで、当時飯沼弘経寺に居た祐天上人に、累の怨霊を得脱して頂きたいとお願いした。祐天は三十六才の血氣盛り、これは衆生済度のため且つは法力を試す機会でもあると、快く承諾した。即ち三月十日から修行にかかろうとしたが、大切な大珠数がない。止むなく若者達に、村中を探させて空木を切り、輪切りにして角を丸め、心に麻の緒を通して、長さ一丈余りのを作らせた。そして祐天が先達となり、大衆はこの大珠数を繰りながら和して念仏した。全く道俗一体不離の信心、近頃になり盛事であるが、累の怨霊は執拗に菊にとりついて、離れない。さすがの祐天も手を焼いてしまった。菊は五体をもんで床から一尺余りも浮き上がり、世の中にこんな苦しみがあるかと思われるほどだ。しかし祐天は少しも屈しないで、口に弥陀本願の密咒と、陀羅尼を誦して、水晶の珠数で菊の体を撫でられた。暫くすると、菊は氣抜けした様な顔で、辺りを見張っている。これを見た祐天は、「怨霊退散間違いなし。」と、叫んだ。

その後助の怨霊も、祐天の供養によって消え失せた。四月十九日菊は全く本服し、七十二才まで長生した。

累一族の墓は現在水海道市羽生町宝蔵寺境内にあり、當時作つた大珠数は宝物として同寺に保存されてある。

## 名越隆成僧正

高橋良和

(中外日報取締役)

島根の隠岐の島に行くために境港から汽船に乗ると、約四時間半にして汽船は西郷港につく。その西郷港に入る汽船の目標が善立寺というお寺である。小高い山寺に一きわ立派な本堂がみえるこの善立寺の住職であったのが名越隆成僧正であった。

この名越隆成僧正は社会事業家としても、また宗教家としてもなかなか活躍した人であって、戦時中は従軍僧として北支にわたり、済南に浄土宗の別院をつくったのであった。隠岐島というのは離れ島のように思えるが、どうしてどうしてなかなか大きな島であって、島前、島後と二ツに別れているが、群少の島を併わせると百いくつかあるらしく、その島のなかでの一ばん大きい寺が善立寺である。今でこそ京都から十二、三時間あれば行けるが、急ぐときなら、玉造温泉からの飛行機だと二十分かかるぬうちに行くことが出来る。然し名越僧正の在世当時はなかなか時間がかったものである。それなのにこの名越僧正はまるで近所でも散歩するような手軽さで京都や、東京にあらわれたものであった。

割合にせっかちであつたから、結論の早い人であつて口をとがらせて話す独特の話し方に魅力があつた。

なんでもデッカイことが好きな人であつて、戦争中であつた済南の別院に來いというのでつい僧正の厚意に甘えて参上

したら、なんとすばらしい学校の建物を寺にして、教線を張っているのはおどろいたし、その上中国僧などをどんどん日本につれてきて交流をはかった手腕は大したものであった。

このようであつたから、スケールの大きさでは一寸ケタはずれの人であつたので、知恩院の門末會議員になつては、知恩院の経営の構想についてもなかなか意見を吐いたのであつて、特に当時ラマ僧を招いて訓育する制度などはこの僧正の意見が反影したものである。

激しい戦争の最中、何十回となく北支と日本を往復して留学僧をつれてきたり、つれてかえったり、ファイトマンのこの僧正にはじめて出来たことである。

僧正の鼻の下には黒いヒゲがあつたし、あごにも濃いヒゲが生えていたし、その上眼がギョロとしていたから、一見一寸おそろしい感じであつた。一寸気にさわると口角泡を飛ばして談論風発、そのあとで「行こう」と人をつれて吞ますことを忘れなかつた。失礼ながらそんなにあり余つた金をもつての事業でもなかつたろうに、隠岐島に共生学園をつくつてこの孤島の社会事業の先鞭をつけた功績は立派であるといえる。おそらく今生きていても七十五、六才ぐらいじゃないかと思うのである。

島に來いと度々すめられて、僧正生前中のいつかの夏、この島を訪ねたことがあつた。するとこの僧正はわたしのために島根県の保育講習会を計画してわたしの旅費をつくつてくれたものであるが、島に赴いてみてさながらこの名越僧正の人望がわかつたような気がしたのである。

地方にあつたよりをいたたく人は多いが、この名越僧正もその一人で、鉛筆の走り書きで遠い北支から度々たよりをもらつたものである。

熱血漢であつたからなんでも頼まれるとひきうけたものであるが、そんなことから随分、あと始末の悪いものも頼まれて、難儀した経験を何度も聞かされた。それほど善人であつたし、人を信頼する心の強い人でもあつた。

戦時中であつたからカーキ色の服をきて、長靴を履いて入洛でもすると、よく兵隊と間違えられたことがあつたのである。あの頃つれてきた中国僧はどうしているだろうか、京都へくる度にそれらの中国僧をつれて中華料理をたら腹食べさせるのが習慣であつたが、人に接待しても、満足ゆくまでもてなす、これがこの僧正の世渡りであつた。

若くして逝つただけに心残りも大きかつただろうと思う。一度隠岐島にも出かけたいと思つてゐる。

# 赤子念仏

宝 田 正 道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

小児の母をたのむは、まったくその故をしらず、ただたのもしき心あるなり。名号を信敬せんことかくのごとし。

## ——一言芳談——

朝夕めっきりと涼しくなった。さすがに秋の気配が忍びよって、草間にすだく虫の声もほそほそと物悲しげにきこえる昨今である。藤村の詩ではないが、「ああうらさびし天地の壺の中なる秋の日や 落葉と共に飄る風の行方を誰か知る」と口ずさみたくなるような寂寥の日々である。人は溜息のような音をたてて冷たい土地に落ちてくる一葉の桐の木に、つくづくと人生の無常を感じるひとときも多いことであろう。心細いかぎりである。

こんな時、人間はふと何か力強いものにすがりつきたい衝動にかられることがしばしばある。異郷に遠く学ぶ友に便りを書いたり、故郷に残した老父母をなつかしんで窓辺に倚

ったり、別れた恋人をしのんでギターをかきならしたりして感傷にふけるのも、秋なればこそひとしおに味わい深い。

人は孤独では生きられない、というが、うすら寒い下宿の一室で、秋の夜長をひとり読書をしたり、物思いに沈んでいる時など、「熱い番茶でも一杯召し上れ」といって、つまみ菓子などそえてもって来てくれるおかみさんの心に、われわれはどんなにうれしい思いをかみしめたことか。若かった昔のことを想い出して共感して下さる読者も多いことだろう。

その茶の味こそ、まことに意味もなく田舎の母の味であり、遠く離れた友の味でもある。まるで子供が、わけもなく母のふところにとびこんでゆくように他愛ない感激である。

ここに掲げた一句は、鎌倉末期に、法然上人以下二十数名の念仏者の心得を集録した『一言芳談』という書物からとったもので、同じ遁世者の顕性房の言葉として採択されているものである。編者は誰かわからないが、兼好法師の『徒然草』にこれを引用しているところから、建武年間(一三三四—一三六)の

頃の作と考えられている。

それはともかく、後世を願う者にとってまことに適切な先輩の格言集であり、この他にもいろいろな名言が収められている。

句意は、念仏を申す心構えとして、ただたのもしさに母を恋う子のように、仏を信じてその名号を唱えるにしかず、ということとを説いているのである。他の項に、明禪法師の言葉として「赤子念仏がよきなり」という句もあるが、同じ趣旨を云ったもので、赤ん坊のように、純粹で素直に念仏を申せとっているのである。

法然上人も、「申せば生ると信じてほれはれと南無阿弥陀仏となふるが本願の念仏にてあるなり。これを白木の念仏とはいふなり」といわれた（勅修御伝巻四十七）。この「白木の念仏」という意味は、やはり「赤子念仏」と同じく、邪心のない、清く生のままの念仏ということである。

白木といい、赤子という、これはともに純粹無垢という意味である。源氏の白旗に對して平家の赤旗と並べるのも、運動会で白組赤組に分けるのも、紅白歌合戦や紅白

の餅などというのも、ともに甲乙つけがたい両者に平等の価値を与えるための便宜上の用語であって、素朴でまじり気のない素人や素焼きのしろ、赤心報国や丹青の誠をあらわすあかが、すなわち白木または赤子と命名するゆえんである。人工を加えない、素朴で、清純な心持で申す念仏、わけもわからず母親を慕う気持で信敬する念仏、それが白木の念仏であり、赤子念仏である。

とかく学問をした人間や智恵を重んずる人は、ものを理解するのに理窟や原理を先に取りかかないと納得しない。法然上人が常にいましめられたように、愚痴に還るとか、尼入道の無智の輩と同じ心境になるとか、いうことは、なかなかできにくい。その点、近代の文人から見ると、念仏は易行ではなく難行である

と錯覚しやすいかもしれない。しかし、理窟なしに母をたのみ

母を慕う心は、どんな学者や芸術家にもある自然の情である。そういう気持で疑いながらも申せば往生できるというのであるから、まったくやさしい念仏行である。

最初にも述べたように、秋こそひとしおものあわれが身近く感ぜられる時である。諸行無常の鐘の聲は、身辺いたるところで耳にする日が多いであろう。そして、「今日は人の身の上、明日はわが身の上」にそれが襲って来ようとは、誰にも分らないところである。

われわれは、白木の念仏や赤子念仏の意のあるところを汲みとって、この秋こそ、すなおに念仏の申せる習慣を身につけ、愚痴に還る真髓を心から味わいたいものである。

業界一の銅瓦及び銅葺一般金具一式……私の先祖の市の真中の宮及び寺、六角堂、納骨堂及び鐘樓の銅並び手間代一式寄進いたしておき、市の中央で板壁では年々破損手入れで大変、板コンクリートに新調奉納。神様仏様への報恩の奉仕故、安く良く致度く、赫々たる定評ある当方へ御相談願います。他所では出来ない卓越せる技術を以て設計等一切無料。職人、大工等大勢。

東京都文京区春日1丁目9の28

銅瓦職協  
相談役顧問  
設計及監督

石黒工業

電話 (812) 1551

# 浄土のこよみ

— 十 月 —

大橋俊雄

柿の実が色づき、稲穂が黄金色にかわる頃町々では「共同募金にご協力を」という声が聞かれ、浄土宗の寺々ではお十夜がいとなまれる。ウチワ太鼓の力強い音の聞こえるのも、この頃である。

今からおよそ五百年ほど前の永享年中（一二四二—一二四四）のこと、平貞国は真如堂にこもって三日三晩の念仏をしていた。貞国は若年の頃から、念仏生活にいそしんでいたが、一週間におこった不和がもとで、世の無常をまざまざと感じ、別行がすんだら遁世したいと願ひ、静かに別時念仏を修していたのである。ところが、満願の夜の明け方夢枕に立った僧は、彼の信仰心

の深いことをほめ、「遁世は三日待つように」と申された。果せるかな、その間に兄の失脚がもとで、弟の貞国は家督をついで執権職となり、家運はすこぶる繁栄したという。瑞夢が上聞に達したとき、更に七日七夜の念仏を修した。蓋し阿弥陀如来に対してのお礼報謝の意味をもった念仏であつたろうが、これが縁となり、以来十日十夜の念仏が、東山のふもと黒谷真如堂で修せられることになった。その後明応四年（一四九五）十月鎌倉光明寺の観普祐崇は、後土御門天皇に召され、宮中で古式にのっとりた引声念仏の十夜法要を修した。時に天皇は殊のほか御感を得、「引声の弥陀経は希代の勝事なり」とおほめの言葉をたまわり、勅によってこの十夜法要を祐崇の住寺光明寺に移されたという。

光明寺といえは十八檀林の一で、一時は八十余宇の学寮を有し、かなりの修行僧が在山していたから、ここで修した十夜法要の法儀は、彼等修行僧によって地方に弘められた。しかし、十夜にも地方により寺によって特色がある。引声阿弥陀経を誦すると共に、信者たちの手によって双盤念仏する鎌倉光明寺の

双盤十夜、声と朗唱の技巧に秀いでた僧により、莊重にしめやかに誦誦文を一本一本よむ八王寺大善寺の誦誦文十夜。又鴻巣勝願寺のように、参詣の群衆が沢山の塔婆をあげて、先祖の供養をする塔婆十夜などがあり、門前に市がたち、遠近からやってきた人たちによってにぎわいを呈する。本来、十夜は陰曆十月の六日から十五日までおこなわれ、満願の日は十五夜にあたり、まんまるい月を背にし、て帰っていった。しかし、今では新曆で、それも月とは関係なしにおこなわれ、十日十夜も今は昔江戸時代までのことで、今では五日となり三日となり、更に一般寺院では僅か一日にすらなつた。時代の進展にマッチさせたつもりであらうか。

極楽はいつも月夜に十夜かな

浪花

十夜とてかしこき法の教えかな

楊良

十夜とて袖ふりあふもたのもしや

成美

スイスの或る寒村の一牧師は、哀れな多くの旅人から助けを求められるたびに、「どうして多く持てる者は何物をも持たない貧しい者たちを助けようとしないのであらうか」と

考えていた。そして種々方策を思いめぐらした末、路傍の立木に櫛の箱を結びつけて、その上に「与えよ、とれよ」と書きこみ、道行く人々の自発的な意志に訴えてみることにした。この思いつきは、多くの人たちの反響を呼び、持てる人々はこの箱の中にお金を入れ、貧しさに悩む人はこの箱の中からお金を出すようになったという。これが共同募金の嚆矢であり、それを組織的な運動にきりかえたのは一八七三年のイギリスにおけるリパブルプランであった。日本では大正十年長崎で始め、同十二年には神奈川県が「社会事業デー」をつくるなどして、局地的には行われもしたが、全国的な動きをするようになったのは、昭和二十二年四月来朝したフラナガン神父の勧めによる。

浄土宗でさしずめこのような動きをした僧を求めるとすれば、三河の律僧深見志運ではなかろうか。志運は尾張三河の両国を巡錫して、五箇所に慈無量講を創立し、講中から喜捨された金品を貧しさに悩む人たちに分けあたえたが、明治二十四年十月におこった濃尾大地震には、病をおして救援につとめ、時に

浄土教報社は此の挙を壮とし、義捐金（ぎとんきん）をあつめて、志運の業を助けた。

この月に忌日をもつ高僧に徳本上人がいる。徳本は宝暦八年六月紀州に生れ、四才の時早くも無常を感じ、出家の志をもちながら



光明寺裏山より

も許されないままに日夜念仏を口ずさみ、二十七才にして漸く望みをとげ、往生寺の大円について出家した。以来千津川・須ヶ谷において苦行をかさね、三昧（さんまい）発得（はつとく）して、文字を習わざるに浄土の奥旨をきわめ、公候土民の帰

依をうけ、南船北馬各地に教化した。今とある村里にも、徳本独特の筆で書かれた「南無阿弥陀仏」の六字名号塔が建てられているのを見かけることがある。教化が広く、しかもひなびた山里にもおよんでいたことを知ることができよう。その間享和元年（一八〇一）十二月小石川伝通院の智嚴について宗戒兩脈をうけ、同十四年小石川一行院の再興なるや推されて中興開山となり、文政元年（一八一八）十月六日、六十一才で世を去られた。

徳本行者伝は、しばしば法鑑につらなうた行誡によって綴られたが、浄土宗侶の伝を編集した人に珂然（かぜん）がいる。彼は大阪生玉法泉寺に住し、院を大蔵転経院と号し、室を修史室と呼んで、吉水実録十五巻をはじめ、忍徹・義山・聞証・珂碩の伝をあみ、又浄土伝灯録を編集するなど、その著は八十数巻におよび、延享二年（一七四五）十月十日、七十七才で寂するまで、史伝の編集に全心を傾けたという。

二十日が恵比須講、二十七日から読書週間がはじまる。

## 往生できない人

五重相伝雑感 その二

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

ある寺の五重相伝の初重往生記、法説分の勸誡の中休みのときのことである。集会堂の襖ごしに聞いていると次のような対話を耳にした。

「今日のお説教じゃあ往生できん人があるって言ったなあ。」

「うん、そう言っとった。」

「おらあ今までどんな人でも往生するのが当り前みたいに思っとったが、」

「おらあの信心じゃあ、あるが如くなきが如き人、くれえなもんだでなあ、」

「ほんとに往生できんとなると、これはちょっと考えるなあ、」

「そうさなあ、」

私はこの話を面白く聞くと同時に何か、かちんとつき当るものを感じたのである。

現代の大乗仏教に於て、成仏とか往生とか言うことばを、あまりにたやすく、安易に使いすぎているのではないか、ここに現代仏教の力の盛り上らない一

因があるのではないか、と言う問題である。

特に浄土宗に於ては罪惡凡夫も往生すると言う元祖上人の廣大無辺の恩徳をいいことにして、このことばのみを大寫しにして、往生できない人の分析があまりに軽々しくとりあつかわれすぎている。

一般の人たちは浄土門の宗旨はどんな人でも往生するものだと思われ、聖道門の宗旨はどんな人でも成仏するものだと思われている。本来の面目はその通りである。しかし宗祖の語録、法語を拝するとき、必ずしもはじめから、無条件に往生を、成仏を、だれもがみな得られるとは説かれていないのである。当り前となったら何の感激も、求道も欣求もないではないか。本宗元祖上人も、往生記の筆頭に先ず「難達往生機」を挙げて十三の不合格者、つまり往生できない人を手

きびしく指摘せられている。このことの意義は正に重大である。(私は往生記を元祖撰述と信じている)

大衆が往生を受取る場合、先ず死後はどこへ行くのか知らんが、肉も消え、骨も失せたときには、人は身心ともに滅んでなにもなくなるが、それでは納得できないから極楽へ往生すると言う思想が生れたのだ、などと漠然と考えている。往生できない人があるなどとは夢にも思ったことがないし、それ故に、往生を輕蔑さえしているのである。だから往生を説く僧をさげすみ、ひいては仏教そのものさえうとんじて真剣に耳をかたむけようとしないのである。

このことは往生記の「五に信心深からず、存るが如く亡きが如き人」と言うことになり、「六に信心一ならず、決定せざる人」となり、「七に信心相続せず間断あるの人」となりつゝには「八に常に疑煩惱を生ずる人となり」「四に(この世に)厭離の心強しといえども(彼の世に)欣求の思甚だ弱き人」と言われるような無氣力な現代人の通弊を生じて、難遂往生の機となり了るのである。つまりこのようなことでは所詮往生はむずかしいのである。

「あなたは往生できません。」

このことばは、往生を願っていた人にも、疑っていた人にもさげすんでいた人にも、否定していた人にも痛烈である。む

しろそれは、呪いのことばとも受けとれる程に辛辣である。自分の知人が、自分の近親が、それよりも自分が、面と向つてこのことばを受けたときの気持はどうだろう。これこそ「題目を唱えなければ不幸がくる」「正宗に入信しなければ仏罰が当る」などと言うことばの比ではない。死後、救いのないことを決定づけるからである。それはこの世の名誉、地位、財産によって償ふことのでき得ない至上命令であるからである。いかなるものを以てしてもごまかしおおせない魂の問題であるからである。このことばを、他に対して言い得ると言うことは容易なことではない。いかに念仏三昧の中に住し磐石の信心を決定し得たとしても、他人にこのことばを投げると言うことは不可能に近い。特に愚鈍念仏の本義よりしてなすべきわざではない。しかしながら、元祖上人は、往生記の巻頭にこのことを言明し、伝灯の祖師はこれを五重相伝の初重に配された。この難遂往生機の至上命令は、自分にも、他人にも、宗祖の真骨頂として頂戴しなければならぬ。三世にわたり、三界をかけてもどこにも逃げ場はないわけである。そう思うとき、浄土宗とは実に恐るべき宗であるのだ。

「二に道心あり誠心もあり日夜念仏す、其の徳他に勝れたる故に諸人これに帰依す、之に依つて布施において貪を生ずる人」実に峻烈、以て己が信に銘すのみである。

# 家康と三河一揆

鶴田 湛 泉

## 五、返り忠

こんな状況になっても、尚且つ家康を中心にして重臣一同鳩首して何とか収拾策がないものかと、幾度か評定が重ねられた。

その日家康は、かつて今川義元が討たれ、大高城を脱出して主従十八騎大樹寺に立寄り信長勢に寺を取り囲まれた時、登誉天室上人から激励のため贈られた厭離穢土、欣求浄土と筆太に書したあの時の旗を、仏間にかかげて凝視していた。

(厭離穢土、欣求浄土、ウム、穢きを厭って、浄きを欣う)それが、この家康の新しい旗印であったはず、と決意したのか、家中の

秩序を立てるためにも、もはやこのままにすまされず、断乎膺懲の態度に出で、十月二十四日、酒井左近将監忠次に手兵を率いせしめて、先ず吉良義昭の立籠る東条の城を攻めさせたのであった。

僧徒も農民も初めは十分武具は揃わなかったが、吉良の一味したことによってその懸念も無くなったと大いに力を得、万一土呂、針崎の両寺が防ぎ難い時には、東条の城に立籠らんものと唯一の頼りと思っていたほどであったから、城兵は頑強に挑戦して来た。

攻撃軍は手強く攻め立てたが、城中からも烈しく反撃して、来て酒井忠次も手を焼かさ

れ、更に加勢として本多広孝も精兵を率いて来て、共に攻め立てたが降すに至らなかった。

その頃、佐崎の上宮寺に、戸田三郎左エ門忠次という武士がいた。元は家康の家臣であったが、事情あって浪人していた。たまたま佐崎に来た時一揆が起ったので、すすめられるままに心ならずも彼等に与して佐崎の砦に立籠っていたのであった。

戸田が佐崎に立籠ったことをきいた家康は「戸田は浄土宗で、一向門徒でなかったはず先に召し出しても、我が命をきかずに出仕もしないでいながら、すすめられて彼等に与するとは、たわけた奴め！」

と酒井正親に憤懣を洩らしたことがあった。このことを伝えきいた戸田は、長らく浪々していたのに、自分の身の上をそれほどまでに案じてくれる旧主家康が急になつかしくなり、又蒙った数々の主恩が思い出されて来て、じっとしていられなくなったのか、何とか返り忠をしたいものと計画を廻らしていた。

そうした心持がいつしか挙動に顕われて来

たものか、「あやしい奴？」とにらまれ出し身の危険を感じると、せめて返り忠の土産にものと、或夜佐崎の外回輪ソトケルに火を放ち酒井正親の宅に駆け込んで、

「それがし、ただ今佐崎の外回輪の門に火を放ちました故、御人数を差遣わされますれば御案内申し上げ先手を仕りまする」と申し入れた。

正親は直ちに馬を馳せ家康にこのことを告げると、酒井左エ門尉忠次が将となって夜討に馳せ向った。

早や外曲輪の門は焼き落ちたのか、火の手は見えなかった。

戸田は勝手知ったこととて佐崎の砦に忍び寄ると、搦手の方へ廻ってひらりと土塀を乗り越え門をさっと開いた。

スワとばかり酒井の率いる兵は、寺内に雪崩れ入った。

「それッ夜襲だぞ！」

「各々 出合え！」

時ならぬどよめきが寺内に起って、上を下への騒ぎとなった。

忽ち出合って来た一揆方と、暗闇の中で追

いつ追われつ入り乱れての混戦となった。

戸田は暗闇の中をあちこち走り廻って下知していたが、かねて彼の声をきき知っていた一揆の兵が、

「戸田め、寝返りおったぞ、……戸田を逃がすなッ！」

と奴鳴った。

「ズドン」

戸田の下知する声を狙って闇に鉄砲をぶっ放った者がいた。

見事兜を射貫かれた戸田は、どっとその場に倒れてしまった。

とかくするうち早や夜も白みかけて来たので、頃はよしと酒井は、

「追手へ乗り廻って、はやばや引きあげよ」と下知した。

味方の面々討ち取った首を提げ、意気揚々と引きとって行った。

戸田の疵きずは幸い薄手だったので、彼も岡崎へ引き上げて来た。

戸田を召し出した家康は、彼の働きをほめたたえた上、国光の脇差を与えてその功をねぎらった。

戸田が俄かに返り忠をしたように、いよいよ戦が始まると、譜代の者など主家から受けた父祖代々の重恩を考えて、一揆に与したのとは軽はずみではなかったかと、心に動揺を来している者もいた。信仰と家臣という点に於て、自己の立場の矛盾に懊悩している者もいたのであった。

矢作川の東の野羽の古城は、当時夏目次郎右エ門吉信の居宅であったが、彼は酒井将監の度び重なる懲慥にあって一揆に与すると、己が居宅を砦として立籠った。

夏目の知己であった乙部八兵衛オトベは、野寺に立籠っていた浪人者の大津半左エ門と共に、一揆の兵を率いて夏目の加勢に来ていた。

家康の命によって、深溝フカミの松平主殿助伊忠は古城をばげしく攻め立てた。

乙部、大津兩人の下知によって、一揆の僧俗は鉄砲で応戦して来た。何分要害堅固な上防戦振も仲々厳しかったので容易に落ちそうな様子もなく主殿助も歯切りしていた。

そんなところへ、一人の家臣が、

「殿、こんなものを」

と敵側から放った矢文を持って来た。

矢文には、

「明夜半、寄手を引き入れましょう。その時刻には必ず合図の提灯をさし上げます」と認めてあった。

矢文の主は、外ならぬ乙部であった。彼は自分の取った行動が軽率であったと、後悔し始めていたのであった。

更に彼は異心なきを示すため、自分の子の太郎を人質にさし出して来た。

その翌夜、合図の火を今やおそしと待ち設けていた主殿助は、灯があがると、部下四十余名を乙部の手引によって首尾よく砦に忍び込ませた。

一方寄手を二手に分ち砦の木戸を打ち破って、どっと鬨の声をあげてはげしく攻め立てた。

不意に夜襲をかけられたこととて、寝耳に水の城兵は、身を武具に固める暇もなくおとり刀で立ち向ったが、散々に斬り立てられて行った。大津は今は抗し難きを悟ると、残兵をまとめ暗にまぎれて針崎さしてさっさと逃げのびてしまった。

この時逃げ場を失った夏目は、再起を計る

ためか、兵糧を納めてある土蔵の中に身を潜めていた。

しかし間もなく夏目は捜し出されて、主殿助の前に引き出されて来た。

夏目は、あにはからんや主殿助の傍に盟友の乙部が控えている姿を見ると、ハッと驚いた様子であったが、忽ち満面朱を染め怒氣をふくんで、

「おのれッ！ 計りおったなッ！」  
とにらみすえた。

「何ッ！ につっき夏目め、ほざくな！」  
主殿助は矢庭に刀を抜いて、夏目に次の句をつがさないうち、一刀両断せんとした。

その瞬間、

「何卒、お待ち下さい」

その腕に、必死にすがりついたのは乙部であった。

「とめるなッ、放せッ」

主殿助は、叱りとばした。

「何卒、何卒、私の申し上げのことを先ずおきき下され」

哀願する乙部の目には、涙がキラリと光っていた。

乙部はもともと一向門徒ではなかったが、夏目とは無二の知己であったので古城に立て籠ったのであった。しかし彼は、この古城をとうてい守り抜くことが出来ぬことを見抜いていたし、且つ夏目ほどの豪勇の武士が、主に逆ってむざむざ滅亡して行くことはどう考えても忍び難く、それ故、何とかして助け出して今一度主君の御用に立たせたいものと思ったので内応したのであると、苦衷のほどを打ち明けて、

「かような次第でございますれば、まげて夏目の命をおゆるし賜われ」と歎願したのであった。

乙部が親友をそれほどに思う友情には主殿助も胆に銘じるほど感動したし、且つ彼の内応の功もあったので城もたやすく落ちたことを考えたが、自分一人で計りかね、家臣に馬を走らせて仔細を家康に告げしめて裁可を乞うた。

「一たん土蔵の中にかくれた者を斬るのは籠の中の鳥を殺すに似ている。助けてとらせ」

と寛大な沙汰であった。

乙部の歎願がきき入れられて、夏

目の身柄は主殿助があずかることとなった。助命の言葉をきかされた夏目はどっかと大地に膝まずくと、岡崎の方を伏し拝んで、

「かかる慈愛深き殿に楯をついたこのおのれのおろかさよ」

と、暫し慚愧の涙を、しばたいていた。家康に畏敬の念をいやましに罵くした夏目は、其の後寺院に詣でた時など本尊の前で、

「何卒ぞ、殿の御為に、この命を捨てさせ給え」と、真摯に祈ることが常であった。後年元龜三年、家康が武田信玄と味方ヶ原で戦って、近侍の家臣のすべてが馬のなくなるほど惨々な敗北となった時、敵兵にとり囲まれ既に危くなり討死覚悟の家康を、夏目が無理に落ちのがしめ身替となって敵の中に躍り込み、槍の柄の折れるほど戦って花々しく忠死を遂げたのは、この恩に報いんがためであったという。

## ヴェトナム便り

私が訪越致しましてから、早くも三十日を過ぎ、ビエンホアの基地をはじめに、フエ・ダナン・ダラトと南ヴェトナムを縦断致しました。各地での仏教信仰の厚いことは日本等とは形を異にしているとは申せ、とても及びません。戦況益々激化、仏教界は人命の尊重、反共と二つの大きな問題を持ちながら苦悩しているのが現状の様に見受けられます。しかし国民の指導者としての自悟は忘れず、伝道に、社会事業にと怠ってはいません。例えば田舎の小さな寺を訪問しても必ず孤児院とか小さな学校、無料の夏季講座、学校、念仏道場の建設と骨身をけずって尽力されていることが見聞出来ます。

国民の表情は各地で異なりますが、ダナンに於ては戦争の町と化しているため、その表情にもかなり暗い面がうかがわれ、ここは夜十一時を過ぎますと大砲の音のものすごいことは全くどきもをぬくが如きで、これに加えてジェット機の発進は大変な数です。このことはサイゴンのタンソンニエット飛行場でもいえることで、私がフエに行きかえりました時はダナン程のすごさはありませんでした。ダラト市より帰った時は、全く戦争の拡大されているのをまの当りにみるごとく、大型の輸送機、大・小の最新鋭機がところ狭しと並べられて居り、常に警戒の小型機、ヘリコプターが旋回して、飛行場入口の警備もすごく厳重で二回も検閲がある程です。サイゴン市内はこのところ二回の爆発事件がありました。市民の表情は平静、繁華街のにぎわいからは戦争を感じさせません。

仏教界は日本の仏教界の援助を切望しており、特に浄土教の新しい思想がよい様に思えます。それはこちらの仏教は大部分が浄土と禪であり、今では浄土教が圧倒しているそうです。物心両面の援助はもとよりですが、世界に平和解決の促進を訴えるのは、仏教界ではやはり日本が一番の様であり、又ヴェトナムの仏教徒達も日本の動きが一番良い様に思っております。先般仏教タイムス社主催の韓国へ仏書を贈呈する運動がありました。今越南の乏しい大学の蔵書から見ても非常に歓迎されることであり、加えて先般大正大学を訪問、学生交流の話がありました。戦乱に次ぐ戦乱で、世界の知識に乏しい越南国民に新しい見識を紹介する意味を含めた親書も良いのではないかと痛感致します。以上要を得ませんが所感乱筆しました。

## 浄土宗中興の学僧聖岡

鈴木 成 元

(大 正 大 学 講 師)

関東の名刹瓜連の常福寺は、了実が延文三年(二二六)常陸太田城主佐竹義敦を檀越<sup>だんいつ</sup>として草創した寺である。その後弟子の聖岡が法灯を継いだ<sup>ついで</sup>が、嘉慶二年(二二八)民家の出火で全焼し、今の地に移して再建した。

聖岡は暦応四年(二二四)佐竹の一族である久慈郡岩瀬城主の子として生れた。貞和元年(二二五)五歳のとき父は流れ矢で死に、域は奪われ、母とともに山に隠れたが、同四年に常福寺の了実のもとで得度<sup>とくど</sup>し聚岡<sup>しゅうかい</sup>と名のつたという。岩瀬城址は田圃の中にあり、常福寺十八世の相閑代に建てられた誕生寺が現存するが、規模からいっても城らしいものではなく、地方豪族の館址であろう。何にしても聖岡の出家は、法然のそれと相通ずるものがあり、必然的なものであったと思つてよい。

聖岡は了実ばかりでなく、鎌倉光明寺の定恵にも師事して勉学にはげみ、『浄土述聞口決鈔』を授与されたが、至徳二年(二二九)には了実の後をついで常福寺の住持になり、その後二十年間、寺の復興はもちろん、道俗貴賤の教化に努めたのであるが、決して安穩な日が続いたわけではなかった。嘉慶二年(二二八)二月、聖岡が住職して間もない常福寺は流矢によって焼失した。その時、寺領の寄進状など全て焼失したが、幸い寺領を侵犯するものもなく、従来通りの収入もあつたため、寺は徐々に復興に向つていった。どのぐらゐの規模であつたかは明らかでないが、時代は南北朝の争乱期、並大抵の苦勞ではなかつたらうと察せられる。

ところがこの中で、聖岡は寺門の復興ばかりでなく弟子も養成し、『往生記投機鈔』『領解授手印徹心鈔』『決答授手

印疑問鈔』『決答疑問銘心鈔』『授手印伝心鈔』を著わして伝法に関する整備を行い、いわゆる『七卷書』が完成するのである。

応永三年（二二六）佐竹の乱のときは、郡内の人々とともに聖間も難をさけ、五キロ弱離れた阿弥陀山の巖穴に身を隠した。これは直牒洞じきてつあなと呼ばれて現存するが、彼は少しばかりの乾柿をもって餓うをしのぎ、巖穴の滴を硯に受けて『直牒』十帖を書いたという。法然は木曾義仲が京都に乱入した日だけ書物を読めなかったと述懐しているが、聖間のフアイトには驚くものがある。



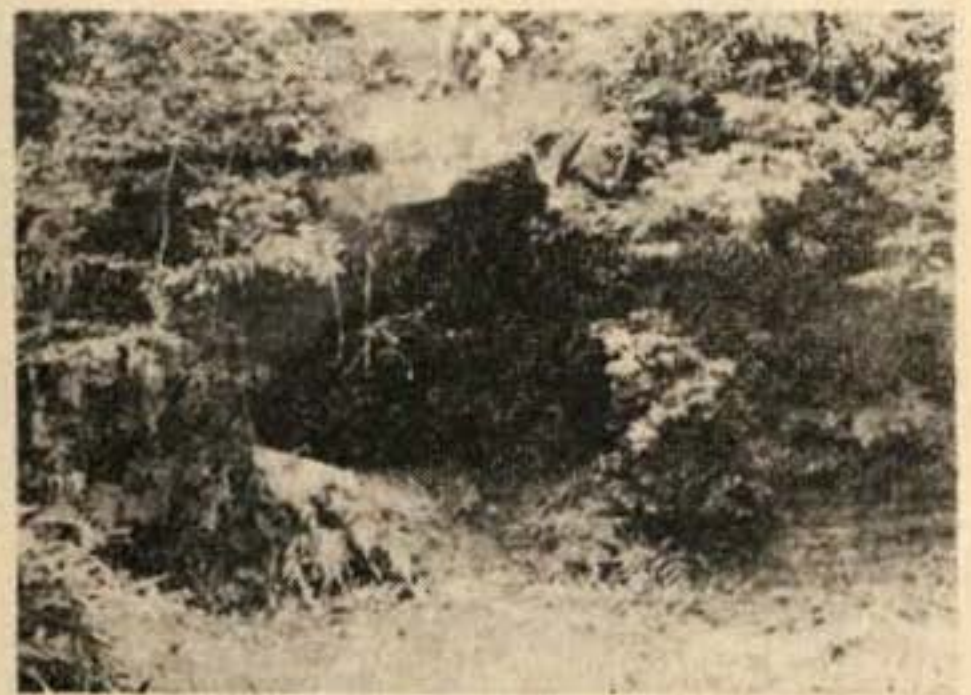
聖間上人木像（常福寺所蔵）西山如拙作

この巖穴の広さは四平方メートルぐらい。正面に不軽菩薩の像が浮き彫りしてある。伝説によると、白い亀が背中に鏡をつけて聖間に献じた、そこで聖間はその鏡に自分の姿を写し、岩に像を彫ったという。土地の人々はこれを不軽菩薩と呼び、いくらけずっても消えないと不思議がっている。阿弥陀山は一名不軽山とも呼ばれているが、この浮き彫り像を不軽菩薩と呼ぶのは後世であり、その当時は、巖穴に蟄居していた聖間自身を不軽菩薩と呼んでいたのではなからうか。巖穴の前には大きな椎の古木がある。土地の人々は当時のものと伝える。そうすれば、この椎の実も蟄居して餓に苦しむ聖間を救ったに相違ない。老いた体を静かに横たえながら、あたかも巖穴を隠しているようである。ここは松坂というところ、弟子の了智が師恩に報いるために香仙寺を建立したが、地名通り松におおわれた山々にかこまれ、水は豊富で気候はよく、蟄居するには好適の場所。土地っ子の聖間なればこそと着眼に感服させられる。

瓜連周辺の人々は仏教に対する関心が非常に薄い。しかし神道に対する関心は格別で、お寺に来てポンポンと拍手かしまを打っておまいりする現状である。それはそれでもよいが、あまり寺へこないところであり、彼岸でもお盆でも、他所の寺院のように多忙ではないらしい。これは水戸学の影響によ

ることは勿論であるが、それ以前にもそれほど信仰のあった土地とは思われない。だからこそ聖岡も庶民の布教には熱を入れたのであろう。本地垂迹の説で神道の共通点を主張するとともに、儒学や説話にも力を入れて多くの著述を物する結果になったのであろう。実際に聖岡の学問は広く、頭の切れるのも無類ではあったが、経済的な裏付けと、彼の環境がそうさせたことを忘れてはならない。この功績から考えると、彼が浄土宗の中興上人とあがめられることは、誰がみても異論のないところである。

応永二十年（西三）聖岡は復興の成った常福寺を弟子の了智に譲り、同二十二年江戸に上って入寂するのであるが、聖岡を江戸に迎えたのは増上寺の開山となった弟子の聖聰である。聖聰は戦乱の最中にも常陸に下って聖岡の安否を尋ね、徹夜で法談を聞くこと再三に及んだ。このようなことは何も聖聰だけに限ったことではなく、飯沼の弘経寺を開創した良肇をはじめ、多くみられるところである。弟子達はお互いに連絡を取り合って師聖岡の慰問を続け、勉学にはげんだ。そこには何ものにもたえがたい美しい愛情ときびしい礼儀とがあった。こうして鋭利な頭脳を持った聖聰は江戸に出て、堅実型の了曉は常福寺を、発展的な良肇は弘経寺から小田原に上って確固とした地盤を築き上げていった。



直 隰 洞 (香仙寺)

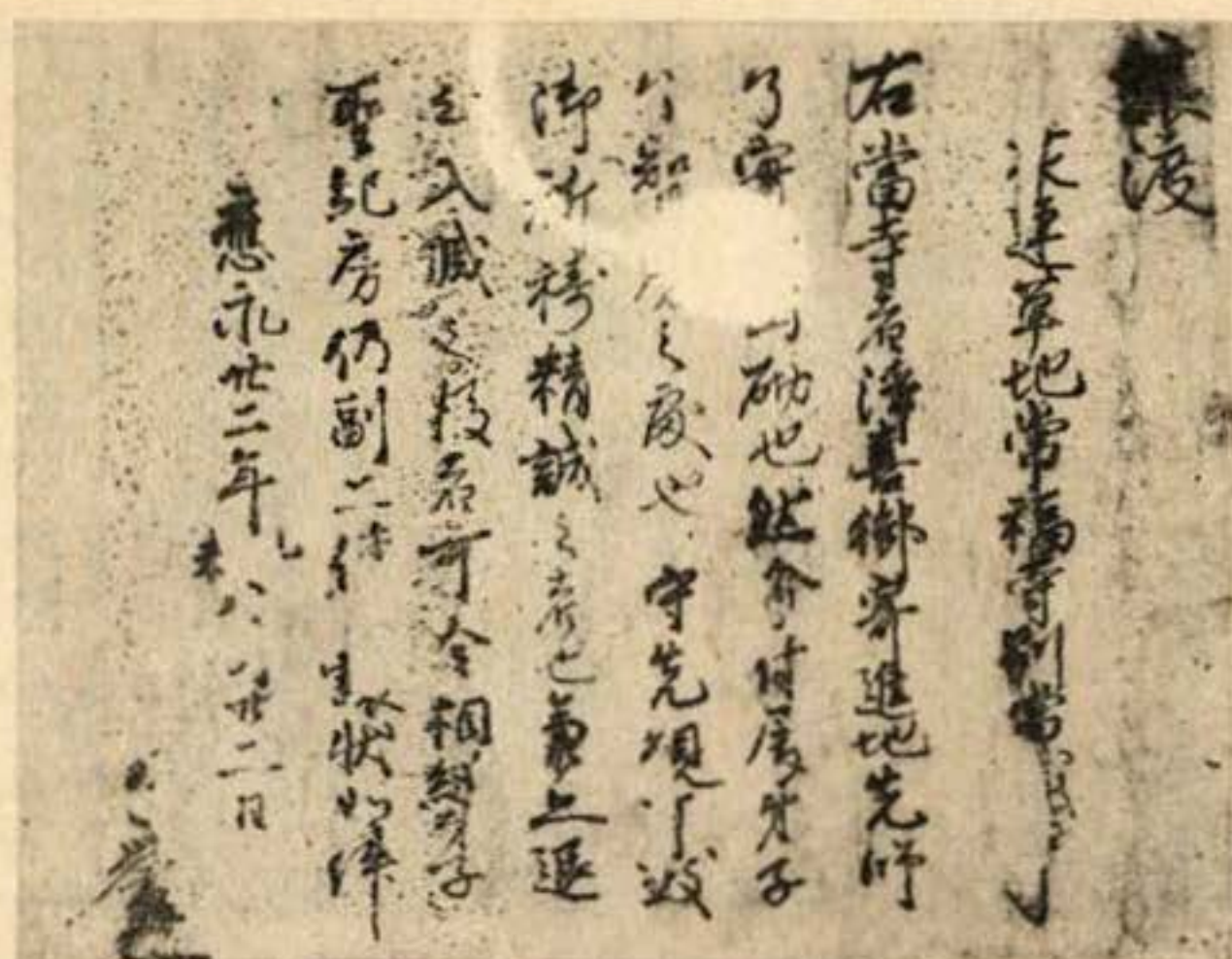
一般の人々に聖岡といったところでわかる人は少ないであろう。増上寺を開創した聖聰のお師匠さんといってもびんとはこない人が多かろう。浄土宗を中興した大切な人であるのに何故このような状態なのであろうか。同じ状態にある真宗の蓮如などとは比較にならない。寂しさこの上もない

限りである。

時間がたてば記憶が薄れるのは当然のことであり、時代とともに社会も思想も変わるのは当然である。だからといってわれわれは全てを忘れることはできない。価値ある歴史的事実は消え去ることはない。学問的には解釈が変わるのはいうまでもないが、史的事実そのものは永久に変わるものではない。それを認識するのが歴史学である。

もちろん伝説は史実ではありえない。しかし、伝説は伝説としてその中に捨て去ることのできない何物かを含んでいる

のである。仏教的な行事を全く軽んずる瓜連地方において、聖罔は不輕菩薩とあがめられ、また忍耐力を謳歌した三日月上人の称呼も通り一遍の呼び名として捨て去ることはできない。とくに毎年九月二十六日の晩に行われる「六夜様」というお祭りは聖罔を祭ったもので注意しなければならない。つまり弥陀を信じない当地方の人々が、弥陀思想を力説した聖罔を神とあがめて盛大に祭るのである。ちょっと常識では考えられないことである。けれども事実はいかなる事実である。



聖罔自筆讓狀(常福寺所藏)

これによって彼の人格がしのばれよう。

珍らしいとか変っているとか、おもしろい、などといって片づける前に、もう一度考えてみる必要があるであろう。

新宗教乱立の現代社会において、仏教はその無能・無力を痛いほど批難されている。しかしその批難は全てを指すものではなく、裏をかえせば関心を持っているということでもある。つまり、それらは仏教の教義に対するものではない。その多くは僧侶の日常生活や檀信徒に対する力の不足をいっているものである。昔と今とは社会も思想も生活も大変な違いである。だから昔の人は信仰があったから寺が栄えたと簡単に割切って考えたらとんでもないことになる。法然・親鸞・日蓮・一遍など、鎌倉時代の祖師方が出て庶民仏教を説いたことは事実でも、それが一般の間に普及するのは室町時代に入ってからのものであり、近世に入ると宗教よりも分家の政治が優位に立ち、政治的な圧力のもとに統制されてくるのである。だから信仰のために檀家になるわけではなく、なにがしかの檀家にならざるをえなかったのである。そして明治になりはじめて信教の自由が認められてくるのである。教義の顯揚も大切には相違ない、だからといってその教義を広めることを忘れてはならない。方法なくして何事も成就しないからである。こう考えてくると、聖罔の足跡が一段と印象づけられてくるのである。

## ご法語をいただく

魔悪修善は、諸仏の通戒なり。しかれども当世のわれらは、みなそれにはそむきたる身なれば、ただひとへに、別意弘願のむねをふかく信じて、名号をとなへさせ給はんにすぎ候まじ。有智無智、持戒破戒をきらはず、阿弥陀ほとけは来迎し給事にて候なり。(百四十五箇条問答)

ある人が法然上人に「お念仏を申すのに当って、悪をやめ善をはげもうと努めながら申すのがよいのか、又はそんな心づかいをやめて、ただひたすら本願を信じて申すのがよいのか、どちらでしょうか」と質ねました。これに対するお答えが、この御法語であります。古くから(阿含經)七仏の通戒という偈があります。それは

「もろもろの悪はなすなかれ、もろもろの善は奉行せよ、自らそのこころを清くする、これ諸仏の教なり」

という短いもので、かつ有名な句であります。

す。このように悪をするな、善を行えということは一見したところ簡単に明瞭なことのようには思われます。しかしこの句のように努めることはできても、この句の通りに暮してゆくことは実際には至難のことといわねばなりません。まして末世に生れ、しかも非力な私どもにはとうてい望めないことであります。

なるほど魔悪修善は仏教のおきてではありますが、それはそれとして、只今は阿弥陀さまがいかなる凡夫も救って下さるという誓いを深く信じてお念仏を申すより外はないのであります。別意は特別な趣意ということであり、弘願は弘く十方の衆生を救うべくお誓いになった阿弥陀さまの本願のことですから、お念仏を唱える者は必ず往生させるということとであります。

さてご法語に「ふかく信じて」とあります。これは心の奥底から信ずるという意味に軽く解してよろしいわけですが、法然上人は常に善導大師の下された説を土台とされていますので、ここでも善導大師の新解釈が当然に含まれているとみるべきであります。即ち經典には単に深心とある言葉に対して、善導

大師は深心に二通りの意味があるとされました。それは

「深心というのは、深く信ずる心ということであるが、次の二種のことを深く信ずるのである。その一には、自分自身がまさしく罪悪生死の凡夫であって、現在の流転の世界から脱れることが絶対にできないということ。深く信ずるのである。その二には、阿弥陀さまはどんな者でも必ず救って下さるので、お念仏を申せば疑いなく往生できると深く信ずるのである。またこのことはお釈迦さまがお勧めになり、十方の諸仏が証明して下さっているので信じて疑わないのである」

というのであります。

難しい学問に専念できない人たち、苦しい修行を続けられない人たち、日々の生業に追われている平凡な人たちを往生させるために阿弥陀さまが長年苦勞され、お念仏を唱えれば往生できると誓われました。従って有智の人でも無智の人でも持戒の人でも破戒の人でも、阿弥陀さまは一樣に疎外することなくお念仏によってお救い下さるのであります。

## 編集後記

○世界の人は、真に平和を渴望している筈であるのに、世界では、常に熱い火が吹き出されています。ベトナムのことはいままさら述べるまでもないのですが、インド・パキスタンの争いは、誠に悲しいことです。

とくにインドは仏教発生の地だけに、われわれ仏教徒としては、何か暗い気持ちにならざるを得ません。一日も早く、本当に世界の平和がくることを、切望してやみません。

○アメリカのクレアモントで行われる宗教学会に、多くの浄土関係者が出席されるため、九月五日羽田を発しました。

増谷文雄、竹中信常、宮林昭彦、佐藤行信、佐藤良

純の各先生です。多大の成果を期待し、誌上での報告を楽しみにしています。

○本誌の広告にあります様に、「変貌する創価学会」が出版されました。なんとしても、相手をしつかり見極めることが必要だと思います。是非とも一冊を求めて熟読して頂きたいと思います。

○八月十五日の終戦記念日の日に、説売ランドで法要があり、佐藤密雄大正大学々長が導師とられました。今回は、これを記念して特集報告いたしました。○知恩院での大正大学の夏期実践仏教は、四十四名の参加で、猛暑もめげず如法に修行が行われました。厳しい戒律のものと実践行は身のひきしまるような行で将来をになう仏教学生に、大きな力となったようです

○高橋良和先生の近世交名録は、ますます快調で好調です。いろいろとお問い合わせを受けて有難く存じます。何んでも先生は画筆もとられる由で、雑誌「知恩」の表紙も先生の筆だそうです。その内、又御厄介になりたいたいものです。

○京都の仏教大学は、最近通信教育部が大いに発展し近時、教育会館の地鎮祭が行われた。ますます今後の発展を祈念して止みません○しばしば申していますように、今年は浄土誌発行三十周年に相当します。本誌では十一月号を特集増ページして、読者の皆様と喜びをわかちたいと考えております。これを機会に読者の倍増をはかり、浄土誌の発展を期したいと思ひます。読者各位の御協力をお願い申し上げます。

### 「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年九月二十五日 印刷

昭和四十年十月 一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区柴田町一ノ二

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四番

振替東京八二一八七番

# ◆ 変貌する創価学会 ◆

浄土宗教学局 編

著者 竹中信常・安居香山・宮林昭彦・藤井正雄・芹川博道

最近の創価学会の動向が一目で分る必見の好著

- |     |                  |
|-----|------------------|
| 第1章 | 新宗教の概観           |
| 第2章 | 新宗教の特質           |
| 第3章 | 創価学会の教学          |
| 第4章 | 創価学会の教学批判        |
| 第5章 | 創価学会と政治          |
| 第6章 | 創価学会とマスコミ        |
| 第7章 | 創価学会の行方と既成教団     |
| 第8章 | 現代社会における宗教の意義と役割 |

- 附表 ① 諸宗教一覧表  
② 創価学会略年表

定価 150円 千 30円 (30部以上おまとめの際は割引いたします)

取次所 法然上人鑽仰会 東京都千代田区飯田町1の21  
振替 東京 82187番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和四十年九月二十五日印刷 昭和四十年十月一日発行

浄土

第三十一卷

第十号

定価金五拾円 (送料六円)

梵鐘のトップメーカー  
日本一の技術と伝統

## 老子の鐘名



梵鐘その他銅合金  
記念・贈答用美術鑄物調整承  
池上本門寺大鐘 香取正彦作

文紋彫刻技術指導  
梵鐘界の權威  
香取正彦先生

音響指導  
青木一郎先生

鑄物師  
老子次右工門

昭和三十九年九月 謹鑄  
口径一・六メートル重量七トン

株式會社 老子製作所

本社 富山県高岡市横田511 電話 ② 0258  
大阪連絡所 大阪市北区曽根崎上1-1 電話 (341) 8847  
大阪支店は電電公社の接収のため上記に連絡所を開設しました御利用願います